

2015



大谷大学

地域での“出会い”が“学び”

大谷大学地域連携室 事業報告書

もくじ

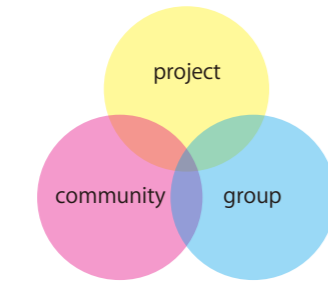
- 02 コミュ・ラボについて
- 03 プロジェクト活動報告
- 04 祇園祭 ぞみゼロ大作戦2015
- 06 中川区の暮らし再発見プロジェクト
- 08 京都府北部福祉フィールドワーク
- 10 地域にも私にもハッピーな
生き方・働き方／動成果報告会
- 12 パブリシティ実績
- 13 コミュ・ラボ情報発信の取組み

コミュ・ラボー新たな学習支援の拠点

大谷大学では、2012年度から始まった「ランドデザイン」発表以降、それまで培ってきた自治体行政や地域団体、企業、NPO、多数の地域住民、卒業生などとの連携や社会への貢献活動の実績を踏まえ、さらに、「出向く・迎える」の相互の関係性を重視した積極的な教育・研究活動を展開し、社会に貢献しようと取り組みを進めてきています。

特に2014年度以降は、地域連携・フィールドワークの取り組みを発展強化し、「学生が地域と接点を持ち、地域での活動への積極的な参加を通じて学習し成長」する能動的学習（アクティブラーニング）をコンセプトとした学びの充実を目指し、2015年度には、実際に地域での活動を通じて、地域社会の課題について調べ、地域や各機関の皆さんとともに考え、アクションを起こしていく、活動「プロジェクト」をサポートする拠点として「コミュ・ラボ」を開設しました。

「コミュ・ラボ」では、具体的な地域（community）での「プロジェクト」（project）実践を通じて、学生が問題を捉えるチカラを養うだけでなく、他者と協力し解決に向かって前進することができるよう、学びのサポートを進めています。さらにそこでは、学生が集団（group）を通じて、意欲的・主体的に学ぶ学習システム、先輩から後輩へと学びの輪を広げつないでいく拠点となることを目的としています。



コミュ・ラボでの学びのコンセプト

地域に飛び込み実践的学びを広げる —プロジェクト型の学び

大谷大学で進めるプロジェクト型の学びとは、地域（ゾーン）を軸に、地域に出向きながら、そこに関わる人々と共にテーマを設定し、「話し、聞き、見ること」、「調べる、読む、まとめること」、「伝える、見返す、やり直すこと」の三つの循環からなる内容を、「課題の発見」、「課題の整理」、「課題の共有」、「課題の解決に向けた協同」という視点から進めていく実践的内容です。

	話し、聞き、見る	調べる、読む、まとめる	伝える、見返す、やり直す
課題の発見			
課題の整理			
課題の共有			
課題の解決に向けた協同			

大谷大学地域連携室 プロジェクト活動報告



プロジェクト活動への参加を通じて身につくチカラ

地域連携室コミュ・ラボのコミュとは、コミュニティとコミュニケーションを意味しており、その言葉通り、地域に出て、様々な活動や団体、課題と出会い、対話し考えていくことを重視しています。地域調査・ワークショップ・イベント運営・情報発信などの様々な活動を通じて、学生にとって役立つ力と経験を身につけます。

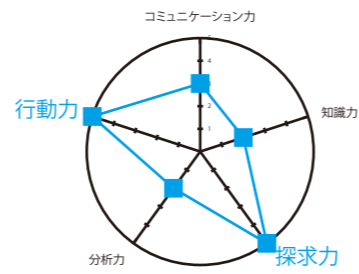
各活動には、それぞれのプロジェクトで身につくチカラのグラフがついています。

活動のテーマからだけでなく、身につけたいチカラから活動を選ぶこともできます。

千年続く伝統の祭を、キレイにエコに次世代へ。

活動場所:京都市中京区、下京区
(祇園祭山鉾町)
活動期間:2015年4月~2015年8月
参加者数:114名

プロジェクトを通して身につくチカラ



プロジェクトアウトライン



京都のみならず、世界有数の伝統的な祭事である祇園祭。祭の山鉾となる山鉾巡行前の宵山行事期間中は、多くの夜店・屋台が四条烏丸を中心に広範囲で立ち並び、国内外から多くの来場者が訪れます。

しかし、来場者数に比例して課題となるのが廃棄物であり、以前に比べ散乱ごみなどは減ったものの、可燃ごみの量は増える一方でした。そこで2014年、NPO、行政、夜店や屋台、ごみ収集事業者などの協力のもと、日本初、そして世界初の試み

として、使い捨て食器を、繰り返し洗って使用可能なリユース食器に切り替える「祇園祭りごみゼロ大作戦」の活動が始まりました。この活動には、のべ2000人の市民がボランティアとして活動を支援しています。

こうした地域状況を踏まえ、2015年度、社会学科の正課授業「社会学特殊演習5」にて「環境問題と市民参加」をテーマに開講。教室での講義の他、環境対策活動の実践として「祇園祭りごみゼロ大作戦」に参加し、実践に参加して得た学びや、活動の改善提案をレポートにまとめました。

また、社会学科以外の学生や教職員など、授業の受講者以外の方も、当日のボランティアとして参加106人、教職員8人の計114人が、活動に参加しました。

活動内容と成果

授業では、祇園祭りごみゼロ大作戦の企画や運営に関わるNPOや行政、ごみ処理事業者など様々な立場の方をお招きし、地域の伝統行事の歴史や、環境問題の現状、課題についてお話をいただき、活動の意義の理解や、モチベーション向上を図りました。

また、当日ボランティアの参加者向けにも学内で事前説明会を企画し、当日の活動内容や心構えを伝えることができました。

7月15日、16日の活動当日は、6名程度のチームに分かれ、リユース食器やごみの分別回収を行う「エコステーション」の運営を担当しました。

リユース食器のしくみ



1. 使捨て食器の代わりにリユース食器を使う
露天商組合の協力のもと、リユース食器を用いて食品を販売していただきます。



2. 食事を楽しむ
使捨て容器よりも丈夫で熱くならないため、利用される方にも好評です。リユース食器を使うことで、ごみ問題への啓発にも一役買っています。



3. エコステーションで食器を回収
使用後の容器は、エコステーションで回収し、後日洗浄します。割り箸やくしなどの燃えるごみと空き缶などの資源ごみも分別回収することで、廃棄物の総量を減らすことができます。



宵山の来場者らに、リユース食器の回収やごみの分別を呼びかけました。

活動参加者たちは、日中は強い日差しの下、そして夜は台風の影響で小雨が降る中、熱心に与えられた役割を全うしました。参加した学生は、あるお店の方から「君たちの活動で、本当にごみの量が減ったので感謝している」と言っていたりするなど、実際に現地でも活動して地域に貢献する経験は、学生にとって貴重な学びの機会となったようです。

祇園祭りごみゼロ大作戦副実行委員長の太田航平さんからは、「台風の影響で悪天候の中、学生たちはとても頑張ってくれた。今回の経験を活かして来年の活動のリーダー役を務めてほしい」と感謝や、今後への期待の言葉もいただきました。

次年度に向けて

次年度も、社会学科の正課授業に伴う実践と、ボランティア活動という形で、祇園祭りごみゼロ大作戦します。次年度は、今年度を越える150名規模の参加を目指すとともに、活動経験者の学生から、活動の事前準備の段階から参加し、当日ボランティアのマネジメントを行うリーダーを募り、地域貢献活動をプロデュースする立場として、より深い学びを得る機会づくりに取り組みます。

参加者の声

■身をもって実感すること、役に立つうれしさ

1~2年生で学外に出て地域の方からお話を聞いて調べる授業を受けたことから、地域の問題に興味を持ちました。NPOや行政、事業者、それぞれの立場から見た廃棄物の問題やごみゼロに取り組む意義を学び、実際に活動することで、その難しさややりがいを実感しました。

来場者の皆さんから、「ありがとう!」と言ってもらえ、誰かの役に立つことのうれしさも知ることができました。経験はチカラになる。だからこそ、学生のうちに色々経験してみたいです。



中井 克哉
滋賀県出身。社会学科3年生

■就活とボランティア活動を両立

祇園祭には、1年生の頃から毎年行っていて、屋台や山鉾鑑賞を楽しんで来ました。昨年(2014年)の宵山で水色のシャツを着ている人を見かけ、気になっていました。大学でボランティア募集を知り、「今年はお祭を楽しむ側からごみを極力出さない運営側になってみたい」と思って参加しました。

就活と時期が重なっていたのですが、不安も躊躇もありませんでした。むしろ、参加することでリフレッシュでき、社会人ボランティアの方からも刺激を受け、とても楽しかったです。

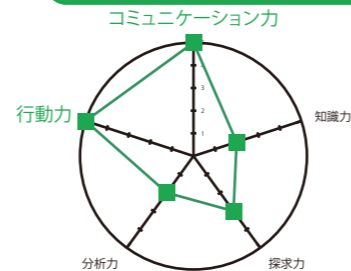


村崎 瞳
兵庫県出身。国際文化学科4年生

山の暮らしを「共に生きる」

活動場所：京都市北区中川学区
 (真弓八幡町、中川北山町など)
 活動期間：2015年6月～2016年3月(継続中)
 参加者数：9名

プロジェクトを通して身につくチカラ



プロジェクトアウトライン



2015年6月27日実施
 中川学区社会福祉協議会の皆さんと

「中川学区」は、京都市北部の山間地域に位置していて、中川・杉阪・真弓という3つの集落から成り立っています。2015年度はそのうちの真弓集落におうかがいして、山の村で生きる人びとの暮らしを追いかけることにしました。

むかしは「北山杉の里」として栄え、川端康成の小説『古都』の舞台にもなった中川学区ですが、近年では過疎化や少子高齢化の影響をまともに受け、いわゆる「限界集落」に近い状況にさえなっています。このプロジェクトでは、大谷大学の社会学科と京都市中川学区社会福祉協議会が協力しあって、現地に暮らす人びとの「生活の質(QOL)」の問題に取り組みました。

中川学区には大きな病院もなければ、子どもたちの通う小学校もありません。真弓集落にはバスも通っておらず、携帯電話の電波すら十分に届いていません。

高齢者が急病のときには、自分たちで車を運転して町の病院に行かなくてはなりません、子どもたちには学校までの送り迎えが毎日必要です。わたしたちがまず目にしたのは、こうした山の村の不便で厳しい生活環境でした。

私たち大谷大学はこのプロジェクトを通じて、地域住民の方々と同じ視線からものごとを眺め、また多くの体験を共有しつつ、地域の人びとと「共に生きる」ことによる社会貢献のあり方について探求しています。

活動内容と成果

わたしたちは月に1～2回のペースで中川学区に通い、さまざまな地域の活動に参加しました。たとえば道の清掃(年3回)がそうです。

清掃エリアの道のりが数キロメートルにおよぶのに対して、真弓集落にはわずか14世帯しかありません。若い力がどうしても必要になる場面です。地域住民の方々からは「本当に助かった」という感謝の声をいただきました。

中川学区の暮らしについての「聞き取り調査」も、このプロジェクトの大きな目的のひとつです。真弓集落では、地場産業である林業の話、シカやイノシシに作物を食べられてしまう話、獣害対策として猟をおこなう話など、普段あまり馴染みのない山の生活について知ることができました。

それと同時に、この地域でわたしたちには何ができるのだろうかと考えさせられ、社会貢献について考えていく上での大きな「学び」につながりました。



次年度へ向けて

大谷大学と中川学区とのパートナーシップはまだ始まったばかりです。プロジェクトの規模を拡大し、引きつづき活動を継続するとともに、大学としてどのように地域社会に貢献できるのかを、これからも粘りづよく考えていきたいと思っています。

参加者の声

■活動で出会った全ての人に感謝



最初は軽い気持ちで参加したけれど、今となっては大きな存在です。
 活動の中で出会った全ての人に感謝しています。

小梶 洋平
 滋賀県出身、社会学科1年生

■最初は不安でいっぱい。それでも…。

大学との連携は今回が初めてです。
 最初は不安でいっぱいでしたが、今は1年目の活動を糧に新たな一歩を進めて行きたいと思っています。

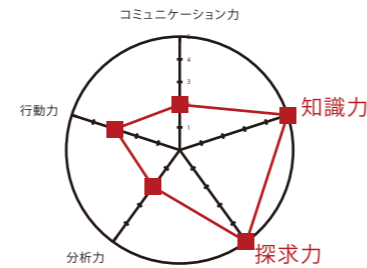


水田 隆一
 中川学区社会福祉協議会 会長

あなたの福祉力を必要とする地域に触れる

活動場所：京都府舞鶴市
活動期間：2016年2月8日～2月11日
参加者数：6名（アドバンス2人、ベーシック4人）

プロジェクトを通して身につくチカラ



プロジェクトアウトライン

福祉の人材不足が全国的な課題となっているのはご存知でしょう。本学においても社会福祉学コースに在籍しながら福祉職を希望せず一般職に就職する学生が少なからず存在します。このような学生に話を聞くと、実際にほとんど知識や経験がないまま一般的イメージだけで福祉職を敬遠しているように感じます。ここでの一般的イメージとは、「仕事がきつい」、「しんどそう」というものです。本学としても、もっと福祉現場の魅力に触れてほしいと思うものの、その機会が福祉現場実習しか提供できない状況でした。



このような折に、京都府が実施する福祉施設インターンシップ助成事業の話をいただきました。はじめに書いたように福祉人材確保は全国的課題ですが、特に京都府北部では喫緊の課題となっており、本助成事業は京都府北部の福祉人材確保を目的としています。北部地域の福祉人材確保を行いたい京都府と福祉現場の魅力を体験してほしい本学の意向がマッチし、京都府助成事業を利用した北部福祉フィールドワーク（北部FW）がスタートしました。学生の受け入れや実習プランの作成・実施は舞鶴市の社会福祉法人大樹会にお願いしました。

北部FWは3年生を対象にしたアドバンスコースと2年生を対象にしたベーシックコースの2種類としました。アドバンスコースは社会福祉士として働くために必要な視点や知識の習得を重視し、特に地域における福祉問題の発見と解決に貢献できる人材の養成を目指しました。

ベーシックコースは、福祉の魅力を感じてもらうため、施設・事業所の見学や職員や関係者の方々との対話に時間をかけました。京都府助成事業の趣旨を尊重するため、参加者は京都府北部出身者を中心に社会学科社会福祉学コースから募りました。

わたしたち大谷大学はこのプロジェクトを通じて、「地域で安心して暮らせる町づくり」に不可欠な福祉人材の養成を目指しています。ここで学んだ学生が卒業後、多くの人々の地域生活を支える福祉人材として活躍し、地域の福祉力向上に尽力してくれることを願っています。

活動内容と成果



- ① コース共通：市役所や福祉協議会の実践について学び、また福祉職として働く若手職員の方々と交流する機会を準備しました。若手職員の熱意や思いに触れ、大きな刺激をいただきました。
- ② アドバンスコース：地域包括事業など地域で行われている実践内容や、そこで重視されている理念などを学びました。高齢者宅の訪問やサロン活動に同席させていただき実際の業務を学びました。
- ③ ベーシックコース：高齢者施設、障害者施設、保育所を見学し、それぞれの施設が行っている実践内容やその特徴の説明を聞き、大学では学びきれない実践の面白さや奥深さに触れました。

④ 成果：目立った成果は二つありました。一つが参加した学生が福祉現場の魅力を大いに感じ、将来の仕事として希望してくれたことです。これによって福祉職を目指す学生の意思がより強固になり、一般職と福祉職を迷っている学生が福祉職を優先するに至りました。二つ目は北部の福祉現場を肌で感じ、そこで活躍している若手職員と交流したことで、都会志向が弱まり、地方での就職に意識が傾いたことがあげられます。

今年度は参加者を募り行った北部FWではありますが、次年度からは通常カリキュラムである現場実習指導の一環として学生を送り出す予定です。大谷大学で社会福祉を学んだ学生がそれぞれの出身地に帰り、地域福祉の担い手となることを期待しています。

次年度へ向け

参加者の声

■ 来年、もう一度アドバンスコースで参加したい

授業で習う「住民主体の福祉」についてなかなか実感を持てずにいました。けれど、実際に施設等を見学することで、地域の利用者の皆さんが自分らしく暮らすための支援ということがよく分かりました。



門脇夕貴
鳥根県出身。社会学科2年生

■ 北部FWでの経験が、この先自分の強みになる

これまで児童分野にしか感心がなかったけれど、プログラムに参加したことで、障がい・高齢者分野への関心も出てきました。実習を通じてソーシャルワーカーとしての技術のみならず、そのための勉強や現場を知りたい気持ちがより強くなりました。

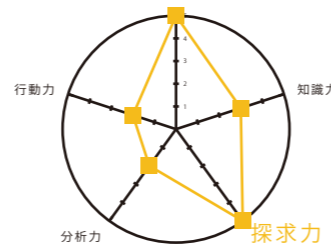


田中慎也
福岡県出身。社会学科3年生

先輩に質問！ 働くことと豊かな暮らしの 両立のしかた

活動場所：京都市北区（本学メディアホール）
活動期間：2015年10月
参加者数：7名

プロジェクトを通して身につくチカラ
コミュニケーション力



プロジェクトアウトライン



「自らの関心を活かし、地域に貢献しながら、働き生活する」というライフスタイルを実践するゲストをお招きし、トークセッションを開催。
「働き方」「生活」「地域貢献」について、学生からの質問に答える形でゲストにお話しいただきました。

セッション後にプロジェクトメンバーとゲスト、そして希望者も交え、学生にとって「働くこと」や「地域貢献」とはどのようなものか、学生時代の今だからできる学びや経験はどんなものがあるのか、意見交換会を行いました。



活動内容と成果

プロジェクトメンバーは、社会学科2～3回生の女子学生。現代社会学・文化人類学・社会福祉学各コースに所属し、それぞれの専攻ならではの観点から「地域の問題」「社会貢献」「キャリア」について話題展開をすることができました。

次年度へ向けて

今回はゲストもメンバーも女性。女性ならではの意見交換もできました。またプロジェクトを通して、大学での学びと社会的関心、就職に関心を持つ学生が多いこともわかりました。
今後は様々な学科から関心を持つ学生がメンバーとなってトークセッションの場を持つような企画へと発展できれば、と考えています。

参加者の声

■ 知れば知るほど興味深くなる

今回すごく楽しかったです。初めはこんなふうになるとは思わなかったですが、関わる事ができてよかったです！
また何かしたいです！

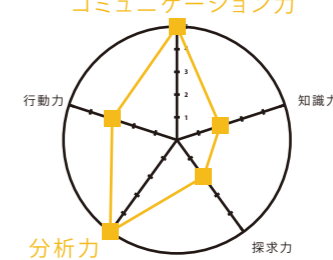
三石 美由
長野県出身。社会学科3年生



現場に赴き、人と出会うからこそ 得られる成長がある

活動場所：京都市北区（本学メディアホール）
活動期間：2016年3月
参加者数：6名

プロジェクトを通して身につくチカラ
コミュニケーション力



プロジェクトアウトライン

2015年度のプロジェクトに参加した学生たち5人がそれぞれの活動についての振り返りと学びを発表する成果報告会を開催しました。

会場には、2016年度の新入生をはじめ、高校生や一般の方など、多くの方々が発表に耳を傾けて下さいました。



活動内容と成果

それぞれ自分の携わった活動の内容をはじめ、活動を通じて感じたこと、学んだことなどを順次報告。自分たちでまとめたパワーポイントの資料を表示しながら、高校生にも伝わるように工夫し、活動に興味を持ってもらえるように丁寧に伝えていました。普段とは違う大勢の前でのプレゼンテーションでしたが、始めは戸惑っていた学生も段々と自分のペースをつかみ、熱意があふれる発表となりました。

次年度へ向けて



今後は、新入生をはじめとした新メンバーも加えて、さまざまなプロジェクトを通じて学生一人ひとりがよりたくましく成長していくこと。そしてその成長を自ら振り返る場として、このような報告会を開催したいと思います。

今は積極的に活動しているメンバーから「高校時代は何もしていなかった」といったエピソードも語られ、親近感がわいた新入生・高校生も多かったようです。また発表メンバーたちも、かつての自分に言いかけせるような気持ちのこもったメッセージでした。



数々の媒体でコミュ・ラボの活動をご紹介いただきました!



2015年度に取組んだ各プロジェクトは、活動を通じて課題の発見と発信を目標に取組んだこともあり、メディアへのリリースについても積極的に取り組みました。

お陰様で地元新聞社をはじめ、テレビ局やWebのニュースサイトでも私たちの活動を多数取り上げて頂くことができました。

2016年度も引き続き、地域の課題と魅力を丹念に探し、発信できるように取組みます。



パブリシティ実績

【新聞】

京都新聞 2015.09.26 / 2016.01.05 / 2016.02.29

中外日報 2015.10.21

【テレビ】

2016.02.26 NHK 京都支局「京いちにち」

【ニュースサイト】

朝日新聞DIGITAL / Lmag.a.jp / Walker+ / 京都で暮らそう / Yahoo!ロコ / SENSEI PORTAL / リバップいい暮らしナビ / ZAQおでかけガイド / Biglobe旅行

など。

日々の活動を発信中! プロジェクトともに充実していきます

Webサイト <http://commulabo.otani.ac.jp>



コンセプトムービー

コミュ・ラボの楽しさがつまったムービーです。活動の温度感が伝わります。



コミュ・ラボの目



学生や先生が撮影した写真をInstagramで投稿中。みんなのベストショットをのぞいてみよう!

アクセス・フォローしてね!
SNSでも発信中!

いいね!しよう。



フォローしよう。



大谷大学 地域連携室

〒603-8143 京都市北区小山上総町

TEL. 075-411-8318 FAX. 075-411-8162

MAIL. commu-labo@otani.ac.jp